

物語に対する読み手の感情の形成プロセスの多様性

1210527 程野 力丸

高知工科大学 経済・マネジメント学群

1. 概要

読み手の物語読解プロセスに着目した研究は幾つも存在するが、それらの既存研究では一般モデルを構築する際に、読み手一人一人のバックグラウンドには焦点を当てていない場合が多い。そこで本研究では、読み手の背景に切り込みながら「物語に対する読み手の感情の形成プロセスの多様性」を明らかにすることを目的とした。研究方法としては、漫画『約束のネバーランド』の第1話を被験者に読んでもらい、その直後にインタビュー調査で物語中の読み手の心情の変化や読み手自身の過去の体験などを聞き取った。インタビュー調査の結果、読み手自身の背景が、物語に対する読み手の感情の形成プロセスについてどのように影響を与えているのかが明らかとなった。

2. 研究動機

「物語」を読んだり観たりした際の、人の反応は千差万別だ。物語を読んで涙を流す人もいれば、その物語に対して面白くないと感じる人も、何も感じない人もいる。世の中で面白いと評価されている作品においてもそれは例外ではない。筆者自身、漫画やアニメ、映画などを観た時、友人や家族とよく感想を話し合ったりするが、自分の「面白い」と思った感情が全く共感されなかったり、逆に相手の「面白い」という感情に全く共感できないことがしばしばある。

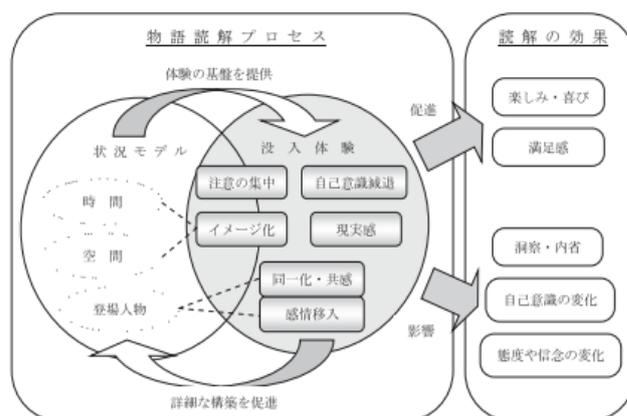
この経験から、人によってなぜこんなにも物語への引き込まれ方や「面白い」の感じ方が違うのかと疑問を持った。そこで本研究では、その理由を調査によって解き明かそうと試みた。

3. 先行研究

物語世界への没入体験—読解過程における位置づけとその機能— (小山内 秀和, 楠見 孝)

物語には映画、漫画、小説などの様々な媒体があるが、小山内、楠見 (2013) は物語の読みに焦点を当て、物語読解の

プロセスをモデルで考察し、そこから没入傾向と没入体験がどのようにして引き起こされるのかを新たなモデルで考察した。(図1)



矢印はそれぞれの概念間の影響の方向を示す。点線は状況モデルの各次元と没入体験の構成要素間のつながりを示す。

図1 没入-物語読解モデルの概念図(小山内、楠見、2013)

小山内、楠見 (2013) は、物語への没入体験がどのように引き起こされ、どのような効果をもたらすのかを仮説として提唱しているが、その中の読み手が実像のない人間であることに、私は疑問を感じた。

つまり、図1には読み手の背景に関する要素が足りないのではないかと考える。そこで、読み手の背景を探るために私自身で実際に読み手にインタビュー調査を行おうと考えた。

4. 目的

本研究では、「物語に対する読み手の感情の形成プロセスの多様性」を明らかにすることを目的として研究を行っていく。なお、研究を進めるにあたり、以下の3つのリサーチクエストを設定する。

Q1. 物語への引き込まれ方は読み手によって異なるのか。

Q 2. もし異なるのであれば、どう異なるのか、なぜ異なるのかを読み手の背景に切り込みながら説明する。

Q 3. Q 2 を説明できるように小山内秀和、楠見孝のモデルを改良することができるか。

5. 研究方法

漫画『約束のネバーランド』の第 1 話を被験者に読んでもらい、その直後にインタビュー調査を行う。その際、物語中の読み手の心情の変化、またそのことにまつわる読み手自身の過去の体験について聞き取りを行った。

5-1 題材『約束のネバーランド』あらすじ

調査で使用した漫画『約束のネバーランド』の簡単にまとめた第 1 話のあらすじを以下に記載する。

この部分は、著作権の関係上、公開できません。

6. 結果

高知工科大学生の 4 名、A 氏、B 氏、C 氏、D 氏にインタビューを行った。インタビュー実施日時と所要時間は以下の通り。

A 氏（男性、2020 年 11 月 27 日、約 60 分）

B 氏（男性、2020 年 11 月 30 日、約 52 分）

C 氏（女性、2020 年 1 月 8 日、約 22 分）

D 氏（男性、2020 年 1 月 7 日、約 44 分）

6-1 A 氏のインタビュー結果

同作品を知らない A 氏は、物語冒頭の孤児院での楽しい暮らしに良い印象を持ち、自身の心も和んだという。このことについて聞き手が尋ねると、A 氏は大学一年生のときに寮生活をしてきたことを話してくれた。A 氏と寮の同じフロアの住人は、一緒にご飯を食べたり、互いに朝は起こしあったりする関係で、5、6 人ぐらいで同じ部屋に集まって朝までわいわい遊んだり、休みの日には自転車と一緒に遊びに行ったりにしていたそうだ。ここで聞き手がこの経験と物語の関係性について尋ねてみた。

聞き手：（この経験を）私に言われて思い出したのか、読んでいる時に思い出していたのか、どっち？

A 氏：思い出してないことはないんですけど、掘り起こされてこの気持ちはこういうことやったんやっていうのに気付きました。

A 氏はこの寮生活の楽しい経験があったため、物語に早い段階で感情移入ができたと考えられる。

また A 氏は物語途中の異様な真剣さでテストに取り組む孤児たちを見て、「この孤児院はスパイ養成施設なのでは？」という仮説を物語途中で立てたという。

しかし孤児の一人が遺体で見つかるシーンを見て、自身の仮説と合わないことから、驚きと「早く先を読みたい」という感情が芽生えた。

その後も展開に対して予測を立てながら読んだという A 氏は、裏切られたという感情が「面白い」という感想につながったのだと考えられる。

6-2 B 氏のインタビュー結果

同作品を読んだことのなかった B 氏は、A 氏とは反対に、物語冒頭の楽しい生活風景にはあまり感情移入せず、途中も大きな仮説を立てて読むことはなかった。冒頭の生活風景に感情移入しなかった理由を知るために、共同生活の経験を

聞き手が尋ねると、B氏は長期間の共同生活の経験はないという。

またB氏は孤児の一人が遺体となって見つかるシーンにも、直前に「不穏な感じがした」とあまり驚かなかったそう。しかし、鬼の存在やシスターが敵であるという事実には驚き、物語後半から一気に感情移入の度合いが深まったという。

ここでも聞き手がB氏自身の過去の体験について尋ねると、B氏から自身の小学生時代の話聞くことができた。

B氏は小学生の頃、人見知りで人前で話すことも苦手で、学校の先生も偉そうな感じがしてあまり好きではなかったそう。しかしある女性の先生が、授業中あえてB氏に発表する機会を多く与え、B氏の人前で喋ることが苦手な部分を克服させてくれたのだという。このことからB氏はこの先生のことだけは好きになったそう。ここで聞き手が、この先生と物語の登場人物のシスターとの関連性について尋ねてみた。

聞き手：それこそ、冒頭の方の優しいママは、その先生に重なるところはあるかな？例えばエマが抱き着いてきてみたいな、こういう雰囲気って、どうかな？

B氏：みんなに平等にやさしいってところは似ているというか、一緒ですね。あんまり意識はしてなかったですけど、無意識で思っていたかもしれないです。

B氏は無意識に先生とシスターを重ね合わせていたため、シスターが敵だという展開にショックを受け、感情移入の度合いも一気に高まったのではないかと考えられる。

また読み終わった後、物語前半の「鬼ごっこには戦略が必要」という伏線がB氏自身の中で結びつき、B氏はこの物語に対して「面白い」と評価した。

6-3 C氏のインタビュー結果

同作品を知らないC氏は「話の展開に驚かされることが多く、面白かった」と感想を述べた。

C氏は、子どもたちへの「外に出てはいけない」という規則や、“柵”の存在を強く意識はしていなかったが、最後の事実を知った時は「モヤモヤしていたものがスッキリした」という感覚を持ち、より物語に引き込まれたという。この「スッキリ」という言葉は、数学教師を目指すC氏が、数学

の問題を解くときの楽しさを表現するときに、以前使ったことのある言葉だった。このことについてC氏はインタビューでこのように語った。

C氏：数学の問題でも、ちょっと前のことからつながるじゃないですけど、自分が思っていた公式ではだめでも、ちょっと前に習ったことを違う方法で使ったらみたいな…ちょっと前のことからつながるっていう意味では、(スッキリしたという感覚が)似ている。

このことからC氏は自身が感じたことのある“スッキリしたという良い感覚”をこの物語へも持ち出していることが分かる。

6-4 D氏のインタビュー結果

同作品を知っており、漫画が大好きだというD氏は、第1話を再び読んで「面白い」という感想を寄せた。

D氏は過去の同ジャンル作品の読書経験から「外の世界には何かがある」と柵や門の伏線に気づき、最後に外の世界の正体を知った時は「期待通り、期待を裏切られた」という印象を持ったという。

またD氏は鬼の存在より、シスターが敵だという事実に一番ショックを受けたそう。D氏がショックという強い言葉を使った理由を深く理解するために、幼少期のことを聞き手がD氏に尋ねた結果、D氏は好きだった幼稚園の先生との印象深い話を語ってくれた。

ある日の工作の時間、D氏はトイレを我慢していたが、耐えきれずおもらしをしてしまい、泣きそうになっていたそう。しかしその先生が状況を察し、周りにばれないようにD氏をトイレに誘導してくれたのだという。トイレでシャワーを浴び、服も着替えて無事復帰したD氏は、同級生に気付かれないように対処してくれた先生に対してやっぱり優しいなと改めて思い、理想の先生だと認識したそう。

ここで、この体験と物語との関連性を、聞き手がD氏に尋ねてみた。

聞き手：私がこの経験談と、ママっていう登場人物に対して、D氏がどういう解釈をしたのかを結び付けようとするのはこじつけですか？

D氏：こじつけではないんじゃないですか。こういうお母さんが良い人やって認識があるってことは、自分にも実体験で

何となくわかるなっていう体験があるからこそだと思うの
で。意識はしなくてもどこかで何となく、わかるわかるって
いう思いはあるのかなと思いますね。

このことからD氏は主人公・エマが育て親のシスターを慕
う理由がよくわかるため、裏切られたときはエマと同様にシ
ョックを受け、読者目線ではスリルを感じたということだっ
た。

7. 分析

『約束のネバーランド』第1話を読んだ4人の被験者の感
想は全員「面白い」だった。

しかしインタビュー調査の結果、感情移入したシーンや物
語に引き込まれるタイミングは以下の表1のようにA氏、B
氏、C氏、D氏でそれぞれ異なることが判明した。また読み
手の感情移入したシーンや引き込まれたシーンを深く掘り下
げると、読み手にとって意味深い過去の体験を聞くことがで
きた。

またA氏は物語を読みながら終盤まで孤児院をスパイ養成
施設だと推理し、D氏は外の世界に何かがあると物語中盤か
ら推理するなど、推理の立て方も読み手によって異なった。

これらのことから、物語への引き込まれ方には、読み手自
身の意味深い体験などが大きく関わっていることが明らかと
なった。

表1 インタビュー結果の比較

	Aさん	Bさん	Cさん	Dさん①	Dさん②
感情移入する タイミング	冒頭の共同生活 風景 (P.1～11)	終盤のシスターが 敵と判明する箇所 (P.48)	終盤の鬼の存在 が発覚する箇所 (P.39～43)	中盤の外の世界 の暗示(P.20～23)	終盤のシスターが 敵と判明する箇所 (P.48)
想起した読み手自 身の過去の体験	長期間の寮生活	小学校に好きな 先生がいた	数学の問題が 解けたときの感覚	類似した作品を 読んだ	幼稚園に好きな 先生がいた
そのような過去の 体験が今作品に 与えた影響	自身の楽しかった 共同生活と今作品 の共同生活とを同 一視	好きだった小学校 の先生を念頭に 置くと、一層ショッ キングに感じた	数学を解くときの ように伏線の回収 を察知	類似作品のシナリ オを元に、ワクワク しながら展開を 予想	好きだった幼稚園 の先生を念頭に 置くと、一層ショッ キングに感じた
読書中の推理	スパイ養成施設と 終盤まで考えた	推理はしなかった	推理はしなかった	外の世界に何かがあると考えた	
漫画を読む頻度	読む	読む	あまり読まない	よく読む	

8. 結論

インタビュー結果を通して3.目的のQ1～Q3 全てを明
らかにすることができた。

Q1. 物語への引き込まれ方は読み手によって異なるのか。

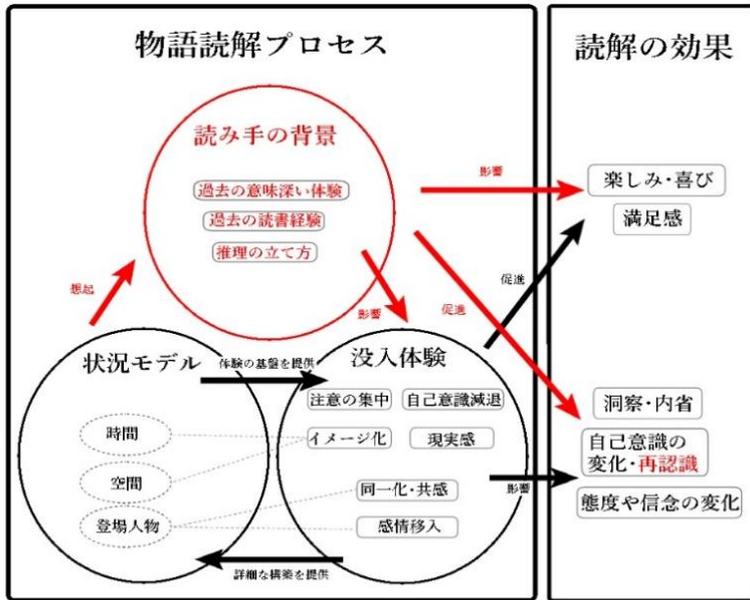
A1. 異なる。

Q2. もし異なるのであれば、どう異なるのか、なぜ異なる
のかを読み手の背景に切り込みながら説明する。

A2. 被験者4人とも感情移入し始めるタイミングやシー
ン、推理の立て方などが大きく違った。また感情移入したシ
ーンや衝撃を受けたシーンについて、インタビューで掘り下
げていくと、読み手の過去の体験などが深くかかわっている
ことがわかった。

Q3. Q2を説明できるような小山内秀和, 楠見孝のモデルを改良することができるか。

A3. 小山内秀和, 楠見孝のモデルに読み手の背景の要素を加えた図2を作成することができた。赤字で書かれている部分が私自身が付け加えた部分である。



矢印はそれぞれの概念間の影響の方向を示す。点線は状況モデルの各次元と没入体験の構成要素のつながりを示す。

図2 本研究が提案するモデル (赤字が更新部)

まず、読み手は物語の状況モデルに触れることで、意識的に、あるいは無意識に自身の背景（過去の意味深い体験・過去の読書経験など）を想起している。そして読み手の背景は没入体験や楽しみ・喜び、満足感などに影響を与えていることが明らかとなった。

またC氏のように、物語を読むことで「数学教師になりたい」という自身の背景が想起され、自己意識の再認識も行われていることが判明した。

本研究では、先行研究を踏まえたうえで、読み手の物語への引き込まれ方をインタビュー調査によって解き明かそうと試みた。

インタビュー調査で確認されたことは、読み手は物語を読む際に物語と自身の過去をリンクさせていること、そしてそれが感情移入に深く関わっていることだ。

より具体的に、本研究で明らかになったことを以下にまとめる。

①読み手に生じる満足感や楽しみ・喜びは、没入体験のみから促進される場合と、読み手の背景からも促進される場合とがある。

②読み手は物語を通じて、自己意識の変化を引き起こすことがあるが、自身の背景を想起することで、自己意識の再確認も行っている。

謝辞

本研究を進めるに当たり、指導教官の中川善典教授からは多大な助言を賜りました。厚く感謝申し上げます。また、インタビュー調査にご協力いただいた皆様にも厚く御礼を申し上げます。

9. 参考文献

(1) 小山内 秀和, 楠見 孝, 物語世界への没入体験—読解過程における位置づけとその機能—, 心理学評論, 2013年 56巻 4号 p. 457-473.